

事 例 調 査

調査対象団体 8団体

団体名称	活動エリア
一般社団法人 office ドーナツトーク	大阪市域
NPO法人にしよどこネット	西淀川区全域
釜ヶ崎のまち再生フォーラム	西成区あいりん地域
特定非営利活動法人榎本地域活動協議会	鶴見区榎本地域
特定非営利活動法人エフ・エー	阿倍野区域全般と隣接区
特定非営利活動法人ハートフレンド	東住吉区桑津、 平野区加美・馬場、八尾市
特定非営利活動法人フェリスモンテ	旭区千林・太子橋、 生野区新今里・巽北
NPO法人緑・ふれあいの家	鶴見区緑地域

- ・調査を行う団体については、団体の取り組む課題や形態が多様になるよう配慮しながら、当審議会ワーキング部会にて選定

団体名 一般社団法人 office ドーナツトーク

【団体の概要】

1 取り組んでいる地域課題、社会課題

子どもや若者が、社会情勢・環境（貧困等）・年齢等にとらわれることなく、それぞれの生き方を安心して選ぶことができる社会をめざす。

2 活動エリア 大阪市域（エリアよりテーマを重視）

3 スタッフ数・構成 約9人（うち約60%は契約社員、10%ボランティア）

4 沿革

2012年 一般社団法人 office ドーナツトークを立ち上げる

2012年 大阪府高校中退・不登校フォローアップ事業を受託

府立西成高校「となりカフェ」を開始（NPO法人み・らいずとの協働事業）

2013年 府立桃谷高校「かめカフェ」（高校中退・不登校フォローアップ事業）を開始

大阪府中間的就労の場づくり支援事業を受託

府立長吉高校「なかカフェ」（aima カフェ）を開始

府立泉尾高校「わたしカフェ」（aima カフェ）を開始

大阪YMCA学院高校「わいわいカフェ」（aima カフェ）を開始

大阪市住吉区子ども・若者育成支援事業を受託

Tameru カフェを開始

2014年 フラウプロジェクトを開始

大阪府中間的就労の場づくり支援事業を受託

aima（あいま）カフェ（阿倍野区）を開設

【きっかけ】

特定非営利活動法人淡路プラッツでの活動を通じて、高校中退、定時制、通信教育の断念を経てニートやひきこもりに至る流れが見え、その最初の段階である10代後半の若者（ハイティーン）への支援が必要と考えた。

【ターニングポイント】

大阪府の高校中退・不登校フォローアップ事業を受託し、府立西成高校で開設した「となりカフェ」というひとつめの取組がうまくいったとき、ハイティーンを対象とした事業展開に手応えを感じました。

5 活動の概要

(1) 高校生居場所カフェ・プロジェクト【府高校中退・不登校フォローアップ事業活用】

府立西成高校「となりカフェ」

府立桃谷高校「かめカフェ」

(2) tameru カフェ（15才以上の無料のサードプレイス）【市住吉区子ども・若者育成支援事業活用】

(3) aima カフェ・プロジェクト（中間的就労カフェ）【府中間的就労の場づくり支援事業活用】

府立長吉高校「なかカフェ」（aima カフェ）

府立泉尾高校「わたしカフェ」（aima カフェ）

大阪YMCA学院高校「わいわいカフェ」（aima カフェ）

aima カフェ（阿倍野区）（6月オープン、2月終了予定）

(4) フラウ・プロジェクト（貧困状態にあるハイティーン女性への支援）

6 活動における連携の状況

- ・高校生居場所カフェ事業ではNPO法人み・らいずと協働。
- ・関係高校、大阪府、大阪市（住吉区）と連携

7 活動のコツを教えてください！

●ミッションとビジョンを持って活動する

目の前の社会的課題を解決するために、NPOを立ち上げるだけでなく、ビジョンとミッションを持って、それを達成するために計画と戦略を持って運営することが必要と考えています。

●社会への発信をしっかりと行う。

ホームページ、ブログ、フェイスブックだけでなく、メディアの取材も受けるなど、情報発信に力をいれています。

ピックアップ事業 「3つのカフェプロジェクト」

1 課題 10代後半の子ども若者が自由に生き方を選択できない現状がある。

2 事業の目的 子ども若者と「サードプレイス」つなぐ
家庭・学校／職場以外の『サードプレイス』をつくることによって解決する。

3 事業の概要

●3つのカフェプロジェクト

①となりカフェ等の大阪府・高校中退・不登校フォローアップ事業

【事業開始時期】平成25年7月

②tameruカフェの住吉区子ども若者育成支援事業

【事業開始時期】平成25年6月

③aimaカフェを中心とした、大阪府・中間的就労の場づくり事業

【事業開始時期】平成26年3月

「高校生居場所カフェ」、「tameruカフェ」で居場所をつくり、「aimaカフェ」で中間的就労の状況を体験し、社会に返していく流れを意識した事業構成となっています。

若者支援では、中学生までの居場所／サードプレイスは各地域に設置されるのが当たり前となっていますが、ハイティーンのための居場所／サードプレイスはまだまだ少数。あったとしても万単位の月謝が必要となる有料のものが主流です。そこで、行政の委託事業を受託することで、無料のサードプレイスを実現しました。

また、中間的就労支援をめざす「aimaカフェ」では、本物のカフェスタッフとして中間的就労を体験し、希望者には就労支援を行うなど、現実に役に立つ就労支援を行っていきたく考えています。

就労支援のポイント

ニートやひきこもりに至るハイティーンは、アルバイトの面接にも落ちてしまう状況にあり、その原因は基本的なこと（あいさつ、メモの取り方など）ができないところにあると感じています。そういった足りない部分を、具体的に補いたいと考えて支援に取り組んでいます。

4 事業のポイント

●ミッションを達成するために事業性を取り入れている意識を持つ。

行政等からの委託や助成などのツールを取り入れることで、目的としている無料支援を実現していますが、取り入れる際には、依頼側の目的と団体の持つミッションがウィンウィンになるよう留意しています。

●NPO活動のひとつのモデルを示したい

ビジョンとミッションを持って、それを達成するために計画と戦略を持って運営するというモデルを示し、そのノウハウを必要とするところにはすべて伝授したい。

5 連携・協働に向けて

●必要、十分な連携を大切にす。

連携においては、ネットワーク化を非常に重視した時もあったが、現在では、具体的に連携すべき課題がある時に、必要なところと十分な連携ができればよいと考えています。

●協働が進む時に必要なものはトップの決断

この間の経験から、協働の成立には、双方の団体の代表者の決断が不可欠であると感じています。

【団体の概要】

<p>1 取り組んでいる地域課題、社会課題 孤立しがちになって、不安や負担感を抱えている子育て層への支援</p>
<p>2 活動エリア 西淀川区域全般</p>
<p>3 スタッフ数・構成 約35人（うち約70%はボランティア）</p>
<p>4 沿革 <u>1996年</u> 子育てサークル「おててつないで」発足 1998年 5サークルで「心の子育てネットにしよどがわ」発足 2008年 NPO法人にしよどにこネット発足 <u>2009年</u> 大阪市つどいの広場委託事業委託開始 「にっこりRoom」2月オープン 「にっこりRoomふくまち」12月オープン 2011年 大阪市西淀川区寺子屋事業「に～よんステーション」4月オープン 2012年 内閣府 チャイルドユースサポート賞受章</p> <p>【きっかけ】 地縁のない都会において核家族という状況で子どもを授かり、人と人とのつながりが希薄な現代社会での「孤立や不安」など子育ての大変さを痛感したことが出発点となりました。</p> <p>【ターニングポイント】 つどいの広場委託事業を受託したことで、一気に活動が広がりました。</p>
<p>5 活動の概要</p> <p>(1) プロジェクト部門 いのちのふれ合い授業、コモンセンス・ペアレンティング・プログラム（CSP）、サークルサポート他</p> <p>(2) 委託事業部門 大阪市つどいの広場事業、西淀川区子育てを応援する担い手育成・地域連携事業</p> <p>(3) ネットワーク部門 西淀川子育て支援連絡会、おもちゃ図書館「おもちゃばこ」、大阪つどいの広場ネットワーク他</p>
<p>6 活動における連携の状況</p>  <p>地域で生活する親子や子育てサークルおよび子育て支援に関わる人や組織を結ぶネットワークを構築することによって、子育ての問題解決や課題達成を図り、親子の主体性を育むことを目的とする子育て支援に関する事業を行っています。</p>
<p>7 活動のコツを教えてください！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域に根ざした子育て支援に取り組みたい思いから「にしよどにこネット」という名称とし、子育ての当事者団体の特性を活かし、気軽に細やかに相談に乗れる支援体制をめざして、西淀川区という区域内に対象を絞って取り組むことで、助けを必要とする方と出会うことができると考えています。 ・目の前の利用者の抱える問題を、にしよどにこネットの取り組むべき課題ととらえ、その課題を解決することで同じ課題を抱える方の課題解決につながると考えて取り組んでいます。 (例) 外国人の区民のために通訳を呼ぶ日を設定したところ、この日の来所をきっかけに通訳のいない日にも来所するようになり、また口コミで外国人の利用者が増えるなど、日常の利用者の増加につながっています。

ピックアップ事業 「子育てを応援する担い手育成・地域連携事業」

1 課題 子育て層が孤立しがちになっており、不安や負担感を抱えている。

2 事業の目的 子育て層の孤立や不安、負担感を解消し、「世代を越えて、地域で子育てを行えるまち」西淀川区を実現したい。

3 事業の概要

【事業開始時期】平成 23 年 4 月

【本市委託料】約 700 万円

(1) に～よんステーション

西淀川区役所 1 階の食堂跡スペース (63 m²) を子育て支援を中心とする交流スペースとして改装して、自由来館施設として開所。世代を超えて人と人がつながり子育てを応援するまちづくりを目指し、次の 4 つの事業を展開しています。

- ・子育て親子の自由交流の場の提供と子育て支援情報の提供：開所日数 195 日、利用人数のべ 8,145 人
- ・子育て支援に関する講座：小児科医相談、多文化交流、ベビータッチなど
- ・地域に密着した情報紙の発行：西淀川区子育てまるごと情報 Coo「クー」(隔月発行、発行部数 2,200 部)
- ・子育て支援に取り組む人材育成講座：「CSP しつけのお話講座」子育てサロン等への「遊びの出前講座」

(2) 地域連携事業

映画上映会、しゃべり場カフェ、子育てを応援する担い手育成講座等の開催を通して、児童虐待のない街づくりを目指すためのネットワークづくりを行っています。(平成 25 年度開始)

4 協働のパートナー

- ・西淀川区役所 子育て支援室
- ・西淀川区子育て支援連絡会
- ・西淀川区子ども・子育てプラザ
- ・NPO法人 西淀川子どもセンター
- ・西淀川区ファミリーサポートセンター
- ・西淀川区子育てサロン
- ・大阪市環境局 西北環境事業センター
- ・小児科医有志の会
- ・大阪市立西淀川図書館
- ・おもちゃ図書館「おもちゃばこ」
- ・つどいの広場 柏里
- ・西淀川子育て支援センター
- ・にしよど おやこ劇場
- ・多文化共生センター大阪
- ・クオレ倶楽部

5 パートナーとの出会い

西淀川区役所が公募で事業企画案を募集し、NPO法人にしよどにこネットの事業企画案が選ばれました。また、これまで培ってきた西淀川区区内で子育てを支援する団体等とのネットワークを活かし、情報誌クーを活用した総合的な情報発信やサポートする際の連携などを行っています。

6 連携・協働した効果

- ・区役所内に開設していることで、利用者に安心してご利用いただけています。
- ・区役所や他の団体と連携していることから、利用者の抱える問題の解決に向けて協力しあうことができるため、利用者の相談を受けやすい体制になっています。
- ・本人同意を得たうえで、区役所とに～よんの間で利用者の情報を共有しているので、問題を抱えた利用者へのサポートを連携して行うことができます。
- ・子育て支援という共通の目的で取り組む連携相手が複数いることから、場所や相談内容など利用者のニーズにあった窓口を紹介することができます。
- ・広報をお互いに行うなど、連携相手同士で総合的に情報を発信することができます。
- ・ホームページの改修はプロボノの協力を得て行い、プロボノの持つスキルのお陰でよいものを作ることができました。

団体名 釜ヶ崎のまち再生フォーラム

【団体の概要】

1	取り組んでいる地域課題、社会課題 単身日雇い労働者、野宿生活者の集住地域での住民の暮らしを、まちづくりを通して再建したい
2	活動エリア 西成区釜ヶ崎地域（あいりん地域）
3	スタッフ数・構成 約25人（うち約100%がボランティア）
4	沿革 1999年 学習サークル「釜ヶ崎居住COM」の呼びかけで「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」創設 2000年 簡易宿泊所活用法ワークショップから簡宿短期宿泊援助制度発足やサポーターハウス第1号運営開始 まちづくりビジョン第1ステージ（緊急対策）、第2ステージ（中期対策）をまとめる 2001年 「釜ヶ崎ボランティア養成講座」開講 / カマ通貨（地域通貨） 試行開始 2003年 NPO法人サポーターハウス連絡協議会 設立 / 「投票へ行こう！社会再参加キャンペーン」開始 2004年 釜ヶ崎のまちスタディツアー（研修受入れ）事業開始 「特区の発想で何が出来る？ワークショップ」を開催（西成特区構想への提案の下地） 2005年 まちづくりビジョン第3ステージ（20年後対策）をまとめる 2008年 創設された「(仮称) 萩之茶屋まちづくり拡大会議」に参画 ← 以後、地域労働者支援団体、施設、連合町会、住民等をつなぐ役割を果たす 2011年 まちづくりひろば 150回記念「あいりん総合計画シンポジウム」開催（西成特区構想への提言に繋がる） 2012年 西成特区構想有識者座談会にメンバーが参画し、まちづくり拡大会議や地域住民の諸提案を報告書に反映 2013年 特区構想エリアマネジメント協議会の各専門部会にメンバーが参画 萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社の設立を促進 2014年 同合同会社が大阪市あいりん地域環境整備事業 受託
	【きっかけ】 1998年に大阪市の野宿生活者数がピークに達し（8660人）、釜ヶ崎居住COM（1996年の国連人間居住会議アジェンダのあいりん地域版学習サークル）が簡易宿泊所の活用やNPOによる新しい仕事づくりなど、まちづくりによる状況打開を考えるフォーラムを地域全体に呼びかけ開催し、それがそのまま、まちづくり団体に移行した。
	【ターニングポイント】 <1>2000年にサポーターハウスがいくつもできたこと （「簡宿活用で野宿者・生活保護受給者の居住支援と生活支援をできる」という当時としては再生フォーラム独自の提案が数百人規模で支援実体となったことで、当団体の存立基盤と発信基盤ができた。） <2>2012年に西成特区構想報告書に諸提言を盛り込めたことによって地域全体を動かすという責任（自負）が比べ物にならないほど高まった。
5	活動の概要 釜ヶ崎地域において、①フォーラムやワークショップを実施し、②構成する住民層の暮らしを再建する方向でのまちづくりビジョンをさぐり、③あわせて事業化していく取組を行っている。 ① 毎月まちづくり定例ひろばを開催し、2014年6月現在で190回に至る。この「ひろば」が地域のまちづくりプラットホームとして機能し、事業の創設を直接的・間接的に促す。 ② 第1ステージ（緊急対策）簡宿活用提案、第2ステージ（中期対策）老いても一人でも住み続けられるまちづくり、第3ステージ（20年後対策）を取りまとめる。 ③ 事業化を促進していく取り組みを行う。 （一例）萩之茶屋周辺地域まちづくり合同会社を設立し大阪市あいりん地域環境整備事業を受託
6	活動における連携の状況 広く地域の関係団体・関係者と連携しながら活動している。 <div style="text-align: center; margin-top: 10px;"> </div>
7	活動のコツを教えてください！ <ul style="list-style-type: none"> ・ いちはやくビジョンを策定し、分かりやすく絵で示して関係者で共有しながら進めている。 ・ まちづくり団体なので、本質的にどんな団体・個人にも中立的な立場をとるようにしている。 ・ どんな団体や個人も地域の資源として支えあう関係になってもらうべく、根気よく連携を進めている。

ピックアップ事業 「あいりん地域環境整備事業」

1 事業の経緯

あいりん地域の課題解決は、地域が主体的に取り組み、それを行政が後押しする形で進めることが必要不可欠であるため、次のような経緯で大阪市が実施する「あいりん地域環境整備事業」を受託することとなりました。

背景	あいりん地域では、公園・道路におけるごみの不法投棄、テント・小屋掛け、駐輪、立ち小便、落書きなど、様々な環境悪化要因が存在。また、覚せい剤の密売など、治安、防犯上の問題が発生。
----	--

事業内容	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 48%;"> <p>○ごみの不法投棄対策及びテント・小屋掛け対策</p> <p>地域住民等と行政が協働し、自立的に不法投棄ごみが少ないきれいなまちづくりをめざすとともに、就労等による自立の結果として、テント・小屋掛けの平和的解決を図る。</p> </div> <div style="width: 48%;"> <p>○通学路の安全対策及び地域の防犯・安全確保対策</p> <p>通学路への防犯カメラの設置及び道路照明灯・街路防犯灯の LED 化等の整備を進め、安心して通学ができる環境づくりや夜間における防犯、安全確保を行う。</p> </div> </div>
------	--

これまで、あいりん地域では、地域と行政との連携が不十分なため、結果として、様々な施策について十分な効果をあげることができなかった。

地域内で特に治安上必要なエリアにおいては、地域の方々の協力を得ながら府警とも連携し、犯罪を生まない環境づくりを行う。

- ・地域が課題解決に対して主体的に取り組み、それを行政が後押しするという形で事業を進めることが必要不可欠。
- ・地域の町会や社会福祉法人・NPO法人等の関係者によって「萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社（以下「まちづくり法人」という。）」を平成25年10月に設立。

◎まちづくり法人が、あいりん地域のまちづくりを、主体的かつ総合的に実施できる唯一の事業者であることから、「あいりん地域環境整備事業」におけるごみの不法投棄対策及びテント・小屋掛け対策については、大阪市とまちづくり法人とで委託契約を行う。

2 事業の概要

【事業開始時期】平成26年4月

【本市委託料】約1億6千万円

ごみの不法投棄に係る巡回・啓発・調査業務を実施して不法投棄ごみの発生を抑制するとともに、清掃業務を実施して現状発生している不法投棄ごみ除去を行います。これらの業務実施の際は、地域に暮らす野宿生活者の方々等の雇用創出・自立支援を図り、あいりん地域の総合的な環境維持・整備を行います。

団体名 NPO法人榎本地域活動協議会

【団体の概要】

<p>1 取り組んでいる地域課題、社会課題</p> <p>榎本地域を誰もが輝く元気なまちにしていくために、次の3つのボランティア活動を中心に活動を行いながら、「地域で支えあうまち」「安全で安心なまち」「花と音楽にあふれるまち」「賑わいのあるまち」「若い世代が地域活動に参加するまち」「100年後を見据えたまちづくり」をめざしています。</p> <p>★ 3つのボランティア活動 【違法駐輪対策】 【安全なまちづくり】 【まちの清掃活動】</p>	
<p>2 活動エリア 鶴見区榎本地域</p>	
<p>3 スタッフ数・構成 活動者数 約300人（うち約99%ボランティア）</p>	
<p>4 沿革</p> <p>1993年 榎本地域の再開発始まる（放出駅前には放置自転車が溢れる） 1996年 放出駅周辺土地区画整理事業まちづくり協議会 発足 2003年 放置自転車をなくそうキャンペーン実行委員会 結成 2004年 ふれあいまつり 開始 かたづけ・たい（路上違反簡易広告物撤去活動員制度） ひったくり防止活動を始める（榎本地区安全なまちづくり推進委員会） 2005年 榎本青色防犯パトロール隊 発足 2006年 えのもと井戸端会議「あいより」開始／はなてん音楽サロン 開始 2008年 えのもと防災訓練 開始／はなてん寄席 開始 2010年 内閣総理大臣表彰 受賞（榎本地区安全なまちづくり推進委員会） 2012年 榎本地域活動協議会 区長認定 / NPO法人格取得 2013年 大阪市児童いきいき放課後事業 受託 小規模多機能型居宅介護事業実行委員会 設置</p> <p>【きっかけ】 放出駅前の放置自転車問題に取り組み、さらに安全なまちにしたいと思ったことがきっかけでした。</p> <p>【ターニングポイント】 これからの活動の方法を考えているときに、近畿大学の久教授より、八尾の井戸端会議を見に行く提案をもらいました。うまく話がまとまり、いろいろな話ができる様子に目からうろこ。これを取り入れて榎本の井戸端会議「あいより」を始めたことで、活動の幅が広がりました。</p>	<p>★活動の経過★</p> <p>数人の有志で始めた駐輪対策活動も、平成15年からは町会単位で行うようになり、朝・昼・夕徹底して違法駐輪を撤収しました。</p> <p>その活動をみて、銀行が駐輪場を作ってくれるなど、商店街や企業の協力者が増えていき現在に至ります。</p>
<p>5 活動の概要</p> <p>えのもと井戸端会議「あいより」という「出席したい人が集まる」、「議題は決めずみんなで持ち寄り」、「合意形成を目的としない」集まりを開催し、この場を使って、地域の情報を共有し、いろいろなアイデアを生み出しながら活動を行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 榎本安全なまちづくり運営委員会 ● 榎本放置自転車対策委員会 ● ふれあい喫茶 ● かたづけ・たい ● 榎本ふれあい社協まつり ● はなてん音楽サロン、はなてん寄席 	
<p>6 活動における連携の状況</p> <p>《運営委員会》 連合振興町会、女性会、民生委員・児童委員、保護司、楽生会（老人クラブ）、防犯委員、青少年指導員、青少年福祉委員、子ども会、小学校PTA、体育厚生協会、母と子の共励会、スポーツ推進委員、コミュニティ委員、青年会、ネットワーク委員会、広報委員会、防災リーダー</p> <p>《協力団体》 生涯学習ルーム、子育てサロン、男の台所、ソーリヤはなてん夢舞隊、いるかの会、はなてん音楽サロン、思い出サロン、パンの木、はぐくみネットワーク、ザ・ハチヤ、かたづけ・たい、青色防犯パトロール隊、放置自転車対策委員会</p>	
<p>7 活動のコツを教えてください！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● まずはやってみる 始める前は大変そうに思えても、まずはやってみる。たとえ少人数でもまずはやってみて、その取組の様子や成果が見えてくれば、賛同者は後からついてくると考えています。 ● 「やりたい人」を勧誘する 熱心に行事や取組に関わってくれた人を、担い手として勧誘するようにしています。例えば、はなてん音楽サロンの担い手に、コンサートの観客だった方に複数加わってもらいました。 	

ピックアップ事業 「えのもと井戸端会議 あいより」・「ふれあいまつり」

1 課題 榎本地域に興味をもってもらいたい

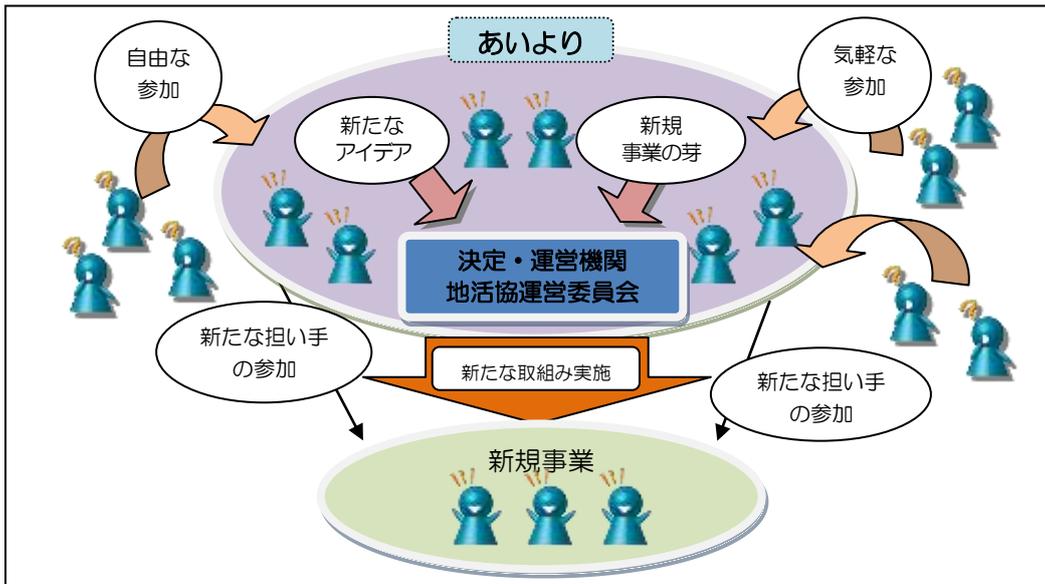
2 目的 地域の情報を共有でき、顔を合わせることができるニュートラルな場づくり

3 事業の概要

(1) えのもと井戸端会議「あいより」

【活動開始時期】平成 18 年

気軽に集まり地域の情報を共有できる場所、井戸端会議「あいより」を行うことで、企画・検討の場に多様な団体が参加するようになり、新たなアイデアや新たな担い手が生まれるきっかけとなっています。



(2) ふれあいまつり

【活動開始時期】平成 16 年

榎本地域で活動するさまざまな団体がお互いに交流し、地域に活動内容を発信していくことを目的に 2004 年に始めました。回を重ねるごとに地域企業、学校、サークル、クラブなど参加団体も増え、地元で活躍する人をたくさん知ることができる場となっています。

4 事業のポイント

●誰もが自由に参加できる雰囲気づくりを大切に

「あいより」も「イベント」も、誰もが自由に参加できるオープンな姿勢を大切にしています。新しい人がスタッフとして参加した際には、自由に楽しんでもらいながらもベテランが丁寧にフォローし、事故等が起こらないように注意も促しながら進めています。

●情報発信を積極的に

ホームページ、ブログ、ツイッター、フェイスブックなどの様々な媒体を使って、広報担当だけでなく各部会からも自由に情報発信を行い、誰もが地域の様子や取組内容を共有できるようにしています。

団体名 特定非営利活動法人エフ・エー

【団体の概要】

1 取り組んでいる地域課題、社会課題 高齢の方や障がいのある方、子育て中の方など誰もが抱えている、地域で暮らしていく上で「ちょっと困った」ことを住民同士が助け合うことで解決したい
2 活動エリア 阿倍野区域全般と隣接区
3 スタッフ数・構成 9人（うち2人ボランティア）はなまる事業従業員30人・ボランティア約60人
4 沿革 <u>1994年 阿倍野区の有志が集まり「助け合い」の学習を始める</u> 1995年 任意団体「ふれあい あべの」設立 有償ボランティア事業（ふれあい活動）開始 1999年 特定非営利活動法人エフ・エー発足 2000年 訪問介護事業（はなまる介護サービス）開始 / 2004年 みなくるハウス オープン 2005年 家事代行事業（はなまるクリンサービス）開始 <u>2007年 阿倍野王子商店街にて「エフ・エーさろん」開所</u> 2012年 阿倍野区長池地区にて「よってこサロン」開所、通所介護事業（はなまるデイサービス）開始
【きっかけ】 さわやか福祉財団の堀田力氏作成の「助け合い」活動のマニュアルを一人の女性に取り寄せてそれをもとに地域住民有志が学習会を始め、発起人を募って1年後に設立、助け合いの活動を開始。
【ターニングポイント】 活動拠点として2007年に物件を購入したことで、場所を持たずサービスの提供だけで活動していた時には低かった知名度が、飛躍的に上がりました。また、場所があることで賃貸料が不要になり、イベントも開催しやすくなり、人も集まりやすくなるなど、活動が広がっていきました。
5 活動の概要 (4) ふれあい活動（有償ボランティア活動） (5) 社会教育事業 ふれあいミニ講座、子育てボランティア養成講座、実習生受け入れ、子ども寺子屋 (6) はなまる事業部 通所介護（はなまるデイサービス）、訪問介護（はなまる介護サービス）、家事代行事業（はなまるクリンサービス） (7) サロン活動 エフ・エーさろん（阿倍野王子商店街）、よってこサロン（阿倍野区長池地区） (8) 組織サポート みなくるハウス運営委員会、大阪宅老所・グループハウス連絡会の各事務局を担う。
6 活動における連携の状況 ●「みなくるハウス運営委員会」構成団体 ・保育グループ「しゃぼん玉」・NPO法人こももネット・地域情報誌「ままちっち」・町内会 ・いちょう大学世代間交流グループ（SA20）・代表は持ち主の山縣文治先生（関西大学教授） ●「宅老所・グループハウス連絡会」の構成団体 【団体会員：23団体 個人会員：30人】 世話人として以下の方々…エフ・エーは副代表として長福洋子 代表：山王丸由紀子（NPO法人フェリスモンテ）以下世話人：高村弘（NPO法人ひかり）米田早苗（NPO法人ほっとすまいる）竹村安子（大阪市立大学講師）柳晴美（一般社団法人わいわい）監事：水野博達（大阪市立大学特任教員）瀬川雅和（NPO法人樹）会計監査：石井順一（社会福祉法人永寿福祉会）
7 活動のコツを教えてください！ ●それぞれの地域の実情に合わせて 他の地域の事例をそのまま真似ることは難しく、それぞれの地域ごとの出会い、発見、感動を見つけることが大切だと思います。それぞれの地域ごとに、その地域だけの偶然、たまたまがあるはずです。 ●ポジティブに周囲を巻き込む工夫を 行動を起こさないと何も生まれてはこないもので、まずは行動を起こすことを心がけています。何かを進めようとする、課題が生じてくるのは当たり前と考えるポジティブさを持ち、課題の解決に協力してくれた人や団体を巻き込んで、仲間を増やしていくことを大切にしています。

ピックアップ事業 「ふれあい活動」・「エフ・エーさろん」

1 課題 高齢の方や障がいのある方、子育て中の方など、誰もが地域で暮らしていく上で「ちょっと困った」ことを抱えている。

2 事業の目的 地域で暮らしていく上での困り事を住民同士が助け合うことで解決したい。

3 事業の概要

(1) ふれあい活動

【事業開始時期】平成7年5月

高齢の方や障がいのある方、子育て中の方など誰でもそれぞれ地域で暮らしていく上で「ちょっと困った」時に住民同士が助け合う活動。

会員登録をすることで、ボランティアとして活動することも、利用依頼をしてサービスをうけることもできる仕組みになっています。

ご利用の時	ボランティア活動をしていただくと	時間預託制
利用料：1時間 600円 (交通費は別途必要)	謝礼金：1時間 600円 (交通費は別途支給)	ボランティア活動した時間を積み立てて、利用したいときに使うことができる制度を採用。 (積立上限：200時間)

(2) エフ・エーさろん

【事業開始時期】平成19年12月

だれでも気軽に立ち寄って、楽しくおしゃべりをしたり、ゆっくりとくつろいでいただける憩いの場を提供しています。イベントも開催していますが、地域のみなさまの集いの場、仲間づくりの場、趣味やサークルの集まり、作品ギャラリーなどにもご利用いただけます。

4 事業のポイント

●多様なコーディネート

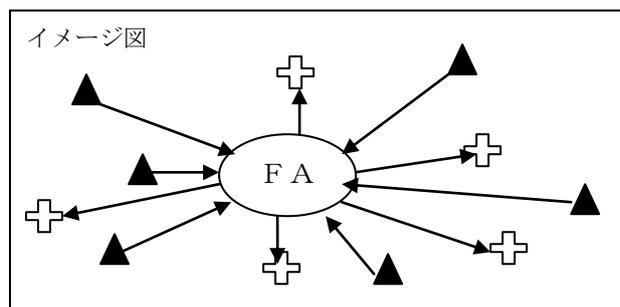
「ふれあい活動」のなかで、「助けてほしい人」と「ボランティア」とを円滑にコーディネートするコツは、区域内で完結させないことだと考えています。「助けてほしい人」は、助けてもらっていることを近隣の方に知られても構わない人ばかりではないことに気をつけています。

一方「エフ・エーさろん」は、人と人が顔を合わせることで、「助けてほしい人」と「ボランティア」とがエフ・エーを介さずにつながり、自然に助け合いが生まれる場となっています。

また、どちらの活動も、「助けてほしい人」と「ボランティア」の立場がケースに応じて入れ替わることができる、助け合いのシステムとなっているところも特徴と考えています。

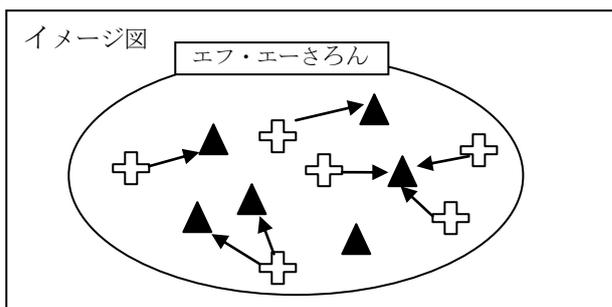
【ふれあい活動】

FAをハブとして、個別につながっているのが特徴



【エフ・エーさろん】

さろん内で、自然に助け合いが生まれるのが特徴



団体名 特定非営利活動法人ハートフレンド

【団体の概要】

1 取り組んでいる地域課題、社会課題

自分の子育てに不安を感じているが、相談する相手がいない親がいる。また、子ども達が、地域の中で安心してのびのび遊べる場所がほしい。

2 活動エリア 大阪市東住吉区桑津、平野区加美・馬場、八尾市

3 スタッフ数・構成 約44人（うち正職員5人、非常勤職員39人）

4 沿革

2003年 地域の空き施設を活用し、「桑津子どもの家」として開所される。

任意団体ハートフレンド発足／「てらこや」「あそびのてらこや」「育児サポート」を開始

2004年～18年 文部科学省地域子ども教室推進事業「地域子ども教室」を受託

「てらこや」「ジュニア・リーダークラブ」「文化部」「あそびのてらこや」「ソフトボールクラブ」を運営

2006年 大阪市つどいの広場事業を受託 ハート広場開設（桑津5-11-19）

特定非営利活動法人ハートフレンド設立 理事10名 監事1名

2007年 文化庁委嘱事業「伝統文化こども茶道教室」開設

地域ですすめる子どもの仕事体験事業受託（大阪市）平成19年度及び20年度

2008年 つどいの広場事業受託「ふれんど広場」（大阪市平野区）・「龍華おやこのひろば」（八尾市春日町）

2011年 大阪市地域子育て支援拠点事業つどいの広場受託「平野おやこの広場」平野区平野馬場

大阪市コミュニティビジネス導入プロポーザル事業受託 地域交流サロン「ひだまりサロン」

2012年 障害福祉サービス事業者及び児童ディサービスの指定を受け「児童ディサービス・ハートフレンド」開設

2013年 新拠点での活動を開始する。「みんなの木」（壁に手形で木を描く）完成

【受賞歴】2004年 大阪東住吉ライオンズクラブよりチャリティファン্ড受賞に始まり、2007年 読売新聞社創設「第1回よみうり子育て応援団大賞」、2010年「内閣府特命担当大臣表彰」など、他多数受賞

【きっかけ】

子育てをするなかで「いつでも参加できて親どうしが支え合える場・つながる場」があればと願うようになったことが、「子どもの居場所づくり」に取り組むきっかけとなりました。

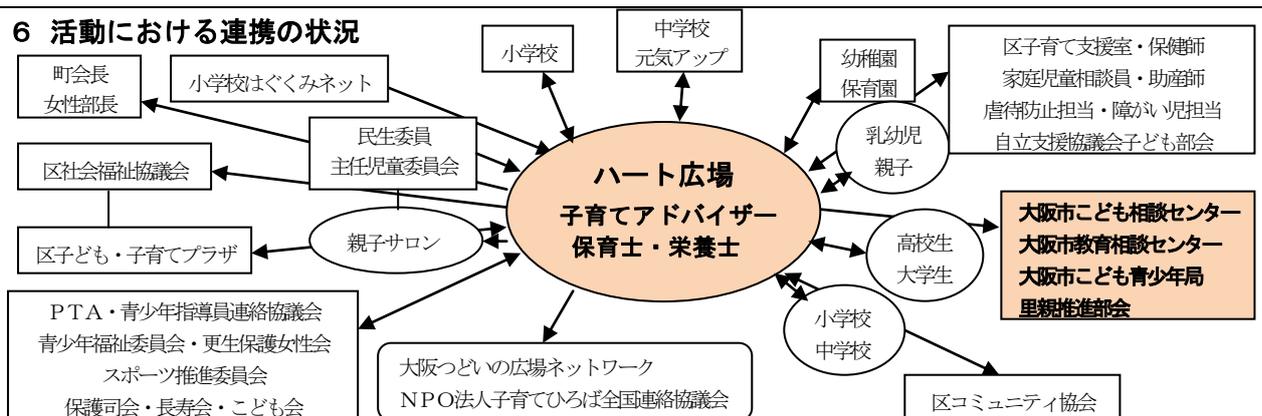
【ターニングポイント】

活動場所を確保できたことで、そこを拠点として活動の幅が広がりました。

5 活動の概要

- (1) 子どもの生きる力を育む てらこや、中学生のてらこや、清掃・探検クラブ、ジュニア・リーダークラブ
- (2) 子どものあそぶ力を育む 文化部、絵画、茶道
- (3) 4つの広場 ハート広場、ふれんど広場、龍華おやこのひろば、平野おやこのひろば
- (4) 地域で子育て支えたい 一時あずかり（乳幼児）、夜間あずかり（児童）、子育てフォーラムの開催
- (5) おとなが生き生きと暮らす講座 おとなのてらこや、おとなの楽校
- (6) 児童ディサービス・ハートフレンド

6 活動における連携の状況



7 活動のコツを教えてください！

●地域に理解者を増やすとみんなが元気になる

自分たちを取り巻く応援団である地域の人たちとのコミュニケーションを大事にしています。相手の気持ちに寄り添い、相手の立場を尊重した話し方を心がけています。

●団体の活動目的に沿った自立した活動を続けるために

委託事業に頼りすぎず、自主事業を増やすように心掛けています。その目安として、委託事業費を全体の2分の1以下にするよう気をつけています。

ピックアップ事業 「てらこや事業」「児童ディサービス」「金魚すくい大会」

1 課題 子育てに不安を感じているが、相談する相手がいない親がいる。子ども達が、地域の中で安心して、のびのび遊べる場所がほしい。

2 事業の目的 子どもの居場所づくり・親どうしがつながれる場づくり

3 事業の概要

●てらこや事業

【事業開始時期】平成 15 年 12 月

学校で習ったことを学びなおせる機会をつくることで授業が分かるようになり、子どもが自信を取り戻すと不登校の予防にもなると考え、母親からの提案を受けて開始しました。

基礎学力向上のために「計算、漢字、音読」を中心に学び、お互いの子どもを教え合うスタイルで、不登校の子どもでも参加できるよう工夫しながら実施しています。

また、「子どものてらこや」の効果が高かったことから、地域住民の要望を受け、高齢者の認知症予防を目的として「おとなのてらこや」も開始し、現在は5か所で実施しています。

●児童ディサービス・ハートフレンド

【事業開始時期】平成 24 年 1 月

障害のあるお子さんの母親からの希望を受けたことをきっかけに、子ども一人一人に合ったプログラムで参加してもらいたいと思うようになり、障がいのある子どもへの支援を学んでいくなかで開設に至りました。障がいのある子どもたちが、放課後・長期休暇などに集う「自信をもち安心していきいきと過ごせる、心地よい居場所」を目指して運営しています。

●東住吉区民金魚すくい大会

【事業開始時期】平成 17 年 6 月

大和郡山市子ども会会長のお招きで全国金魚すくい大会に参加したことがきっかけで、誰もが楽しめる内容に感動し、自分達の住む地域で開催したいと考え、大和郡山市役所の助力を得て実現しました。当初から、桑津地域の地域団体のみなさんの協力を得て開催していましたが、平成 25 年からは桑津地域活動協議会主催となりハートフレンドは事務局を担うことになりました。

4 事業のポイント

●助けられ上手になる

自分たちだけで頑張ろうと思わないようにしています。自分たちにはない専門性をもった他の団体に協力していただく。「助けられ上手」になることも大切だと考えています。

●人材確保の工夫

「目的」「お手伝いしてほしい内容」「その効果」を丁寧に伝えるようにしています。なかでもお礼は顔を見て伝えることを大切にしています。

5 連携・協働した効果

- ・地域の団体の皆さんと連携することで、協力者や参加者などたくさんの支援を得ることができ、事業に広がりが生まれました。
- ・金魚すくい大会では、桑津地域活動協議会の主催となったことで、それまで以上に寄付が集まるなど盛況となりました。

団体名 特定非営利活動法人フェリスモンテ

【団体の概要】

1 取り組んでいる地域課題、社会課題

「誰もがこちよく暮らせるまち」をめざして

自分の暮らしてきた地域で同じ町の人々に支えられ、自分の家と同じように過ごせることが、最も自然な暮らしです。そんな暮らしを支えるシステムをつくり、運営することをめざして取り組んでいます。

2 活動エリア 旭区千林、太子橋 生野区新今里、巽北

3 スタッフ数・構成 約117人（内訳：正職員10人、パート76人、ボランティア31人）

4 沿革

1997年 勉強会を始める（認知症のことを知る場、ぐちを聞く場）

1999年 特定非営利活動法人格の取得

2000年 訪問介護・居宅介護支援事業所を開設

「おたっしやセンター」「おたっしやケアプラン」

2004年 高齢者賄いつき下宿を開設「おたっしやグループハウス」

2007年 コミュニティ喫茶を開設「花しょうぶ」旭区太子橋

2011年 幼児の一時預り事業を開始「ちびっこはなしょうぶ」旭区太子橋

高齢者賄いつき下宿を移転「おたっしやグループハウス」旭区太子橋

居宅介護支援事業所を移転「おたっしやケアプラン」旭区千林

2013年 訪問介護事業所を移転「おたっしやセンター」旭区太子橋

居酒屋を開始「はなしょうぶ」

【きっかけ】

身近な人の介護を通じて、「いくつになっても地域で暮らしていきたい」という思いを抱いたこと、また、「独居の高齢者でも自分らしく暮らせる共同住宅（アビリティハウス）をつくりたい」という目標を掲げたことがきっかけとなりました。

【ターニングポイント】

介護保険法に基づく訪問介護などの事業者指定を受け、事業の展開に踏み切った時が大きなターニングポイントだったと感じています。ボランティアとして活動していくか、事業を実施するか、当時のスタッフで議論を繰り返し、賛同を得ることができた約半数のスタッフと事業を立ち上げました。

また、2004年にグループハウスに取り組めたことも自信になりました。

5 活動の概要

(1) 介護事業部

訪問介護・介護予防訪問介護、通所介護・介護予防通所介護（高齢者）、
居宅介護・重度訪問介護（障害者）、生活支援型食事サービス、高齢者賄いつき下宿

(2) ケアマネジメント事業部

居宅介護支援

(3) 地域交流事業部

コミュニティ喫茶、つどいの広場（地域子育て支援拠点）、おたっしやサービス（たすけあいサービス）、おたっしやコール（安否確認コール）、サロン・倶楽部（絵手紙・大正琴・謡曲教室）

6 活動における連携の状況

- ・大阪有償ボランティア団体連絡会
- ・大阪託老所・グループハウス連絡会（世話人会：月1回、勉強会：年2回、交流会：年2回）
- ・NPO法人おおさか元気ネットワーク
- ・つどいの広場のネットワーク（ハートフレンド、にしよどにこネット、ぽっかぽかなど）

7 活動のコツを教えてください！

●できることをできる人がやっていく

ニーズに沿った取組を、やりたい人、やってみようと思う人がやることを大切にしています。また、フェリスモンテの場合は「誰もがこちよく暮らせるまち」といった、ビジョンやミッションを持ち続け、これに沿った事業を展開するよう留意し、本来の活動の目的を見失わないよう心がけています。

●活動を長く続けるには、柔軟に、ふところを深く、よいかげんに構える

まずは、できることはやってみる、すぐには断らないことにしています。

「あかんかったらやめたらええ。」というくらいの柔軟性を持って、活動を続けています。

ピックアップ事業 「おたっしゃセンター」・「おたっしゃグループハウス」・「居酒屋」

1 課題 自分の暮らしてきた地域で同じ町の人々に支えられ、自分の家と同じように過ごせることが、最も自然な暮らしだと思っていますが、そんな暮らしを支えるシステムはまだまだ不十分

2 事業の目的 自分の暮らしてきた地域で誰もがこちよく暮らせるようにする。

3 事業の概要

(1)おたっしゃセンター（千林・今里）

【事業開始時期】平成 11 年 4 月

ヘルパー派遣。独自事業、介護保険法、総合支援法により、要介護の方の家に訪問し入浴介助や排泄介助などの身体介助や料理補助や清掃支援などの生活援助を行っています。医療関係からのご依頼も多く、重度の要介護の利用者も数多くいらっしゃいます。「一人ひとりが在宅で暮らすために」を実現するために、日々の研鑽を重ねています。

(2)おたっしゃグループハウス

【事業開始時期】平成 16 年 9 月

高齢者の方が家庭的な雰囲気のもと暮らすことのできる共同住宅です。6 名の入居者・スタッフがひとつ屋根の下で家族のように過ごせることを目標としています。日々変化する入居者の体調や、集団生活を行っていく上での配慮を考えながら、日々試行錯誤しています。他のサービスを利用している方にもスタッフとして協力してもらうなどの工夫も行っています。

(3) 居酒屋

【事業開始時期】平成 25 年 8 月

知的障害を持つ人で運営する「居酒屋」を、コミュニティ喫茶を活用して土曜日限定で開店しました。調理師 1 名、飲食業経験者 2～3 名のスタッフをフェリスモンテの職員がサポートする形で運営しています。知的障害者の方の自立を促すことも目的としています。

4 事業のポイント

●自分のことだと感じられたら人は集まってくる

スタッフ集めでは、人ごとではなく自分のことだと感じてもらうことがポイントだと考えています。やってもらうではなく、やりたい人を集める。また、サービスを受ける側と提供する側は別ではないとの考えを持ち、サービス受給者にも、できること、やりたいことがあればサービス提供者になってもらっています。

豆情報

- ・「フェリスモンテ」とは、スペイン語で「幸福」と「山」という言葉を合わせたものです。“地域福祉の幸福の山となるように、地域にあったグループハウスが山ほどできるように”との思いを込めています。
- ・ミッションを表す分かりやすい言葉として、事業所名に「おたっしゃ」を活用しています。
- ・コミュニティ喫茶は区の花から「花しょうぶ」という名前にしました。

団体名 NPO法人緑・ふれあいの家

【団体の概要】

1 取り組んでいる地域課題、社会課題

誰もが住みよく安心なまちをめざして、地域のさまざまな団体が相互に連携・協力して活動を行い、より多くの方が自らの為に、自らの力で地域発展に取り組んでいる。

2 活動エリア 鶴見区緑地域

3 スタッフ数・構成 常勤4名／有償ボランティア 約55名（うち女性部 約13名）

4 沿革

2010年8月 緑社会福祉協議会に地域問題検討会設置

2011年8月 地域活動協議会設立準備委員会開催

12月 地域活動協議会で年間の事業計画策定

2012年6月 地域活動協議会と他団体との関係等検討会の同時開催

8月 緑地域活動協議会区長認定

12月 特定非営利活動法人緑・ふれあいの家設立

12月 井戸端会議開始

2013年5月 高齢者食事サービスを拡充（地域活動協議会の事業としてリスタート）

12月 大阪市児童いきいき放課後事業を受託（みどり小学校、鶴見小学校、焼野小学校）

【きっかけ】

2010年なにわネットワークの関係で平成23年に地域問題検討会を行ったこと、親が地域の民生委員だったこともあり、この地域を長くお世話してくれた会長が引退される折に後を任されたこと、また、小学校が荒れた時期があり、これを何とかしなければと思ったことなどがきっかけでした。

【ターニングポイント】

もともと広報に力を入れており、過去の取組と現在の状況をSNS、インターネットなどを活用して広く知らせるように努めてきたが、それだけでは伝わらないと感じたことから、平成24年12月から井戸端会議を始めた。意見を言うのが苦手な人でも、こういう場を作ることで話しやすくなり、新たな取組が生まれるきっかけともなっています。

5 活動の概要

「地域福祉文化部会」「体育・青少年育成部会」「地域防犯・環境・美化部会」の3部会を設置し、事業を実施。「緑ふれあいの家」や「緑福祉会館」などを会場にいろいろな取組を展開しています。

- 子育て支援事業
児童いきいき放課後事業の受託など
- 地域交流事業
緑・ふれあい市、緑いどばたクラブ
- 高齢者食事サービス・日曜ふれあい喫茶
- 研修・講座事業
交通安全教室、緑生涯学習ルームなど
- 地域安全対策事業
青色防犯パトロール、子ども見守り隊

6 活動における連携の状況

＜NPO法人鶴見区ええまちネットワークとの連携＞

- ・区の統合を見越して、コミュニティの中心となるために構築。
- ・鶴見区役所（行政）ができないことに取り組むのが目的。

＜協力団体＞

区役所、社会福祉協議会、学校（緑小学校、鶴見商業高校など）、お寺、近隣の地活協（焼野、鶴見、榎本）近隣の企業（ビープラスシステムズ株式会社）、長野県須坂市、小布施町、徳島県、和歌山県紀の川市など

7 活動のコツを教えてください！

●情報発信を大切にしている

- ・広報に力を入れてきた。過去の取組と現在の状況をSNS、インターネットなどを活用して広く知らせ、それだけでは伝わらないと感じたことから、平成24年12月から井戸端会議を始めた。
- ・緑の持っている広報媒体（HP、井戸端会議）だけでなく、鶴見区、地振会長会、社協の会合、NPO運営委員会など、あらゆる媒体、場面を活用して発信するよう心掛けている。

●NPO法人格を取得したことで活動の幅が広がった

- ・任意団体ではなくなり、契約主体になれる。財源確保を考えるにしても、事業一つ行うにしても、法人格があるほうが活動しやすいと感じている。

ピックアップ事業 「緑いどばたクラブ」「児童いきいき放課後事業」 「高齢者食事サービス・日曜ふれあい喫茶」

1 課題 まちづくりに関わる人のつながりをさらに円滑にし、また、地域で子どもを育てる仕組み、高齢者が安心して暮らせる仕組みをつくりたい

2 目的

- ・いろいろな人や意見を受け入れる場を作ることで、まちづくりを客観的に見直す機会をつくる。
- ・地域で子どもを育てるための場づくりとともに、子ども関わる大人のネットワークをつくる。
- ・地域で高齢者が安心して暮らせる仕組みとして、食事サービスや集いの場をつくる。

3 事業の概要

(2) 緑いどばたクラブ

【開始時期】平成 24 年 12 月

地域で活動する企業、団体、地域の方とそのお友達、学校の先生などの様々な方が集まり、ニュートラルな立場でいろいろな話をする中で、「地域活動」や「まち」についても考えるきっかけになり、また、顔の見えるつながりを作る場として開催しています。

「どなたでも参加でき、出会で仲間が増えると、あなたの住むこの地域が盛り上がる」をキャッチフレーズに、誰でも気軽に参加できるようにしています。

女性会の方が時間をかけて心をこめて作るお母さんの味付け料理と楽しく飲めるお酒、最後のお茶漬けがあるときは早い者勝ちの状態になるなど、50 名以上の参加者で話題も豊かに盛り上がっています。

(2) 児童いきいき放課後事業

【開始時期】平成 25 年 12 月

近年の学校荒廃が身近にも発生した現状に直面し、学校長や保護者等の要請に基づき、アンケートやインタビューを通じて学校と地域との関わり方を種々検討し、同時に平成 25 年 1 月からは「いきいき事業検討会」を立ち上げ、この事業の有効性に気付き、事業の受託に至りました。

この事業を通じて、子どもたちが安心して学ぶことができる安全な場所を確保するとともに、大人も子どもたちと一緒に学べるような場づくりをめざしています。

(3) 高齢者食事サービス・日曜ふれあい喫茶

【開始時期】平成 25 年 5 月（地域活動協議会の事業としてスタート）

高齢者食事サービスとして、毎週木曜日に、緑ふれあいの家で食事サービスを実施するとともに、併せて宅配サービスも行っています。1 回の提供数は 50～60 食です。

また、毎週日曜日には、日曜ふれあい喫茶を開店し、つどいの場となっています。

4 事業のポイント

●他団体と連携するためには

- ・やりたい事を発信して仲間を探しています。
- ・「利害関係が一致していること」「目的が一緒であること」を確認しながら連携を進めています。

●情報発信を積極的に

- ・緑の持っている広報媒体（HP、井戸端会議）だけでなく、鶴見区、地振会長会、社協の会合、NPO 運営委員会など、あらゆる媒体を活用して積極的な情報発信を行うよう留意しています。

ヒアリング調査 結果要旨(平成26年8月12日(火))

地活協とNPO・ボランティアグループとの好事例	地活協と企業・学校・商店街等との好事例	意見・所感
<ul style="list-style-type: none"> ・敬老会などへのパフォーマンスボランティアグループを紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門学校や通信制高校と連携した地域イベントの開催やイベントのポスター制作への協力。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・学生ボランティアと商店街との連携 ・学生ボランティアと学生アイデアのコラボ商品 ・子供による壁画の描かせる(落書防止にもなる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街が地活協の構成団体となり、活動を担っている。 ・高校生が、地活協の事業にボランティア参加。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域側には「NPOは怪しい」という先入観が強く、マッチングへのハードルはかなり高いと感じています。
<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動協議会の運営を軌道に乗せる状況である。 ・実務者レベルでは、無償スタッフの地縁型市民活動団体と有償スタッフのNPOとの意識の差が、協働の壁となっているとの声が地縁型市民活動団体から出ている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動協議会の構成団体に、施設や地域包括支援センターの参画が進んできている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NPOとの連携は必要かもしれませんが、その前に地活協そのものの足腰を強めていきたいと思います。 ・地活協は、「NPO法人とは何?」「どんな団体?」と感じていると思われることから、連携より以前にどういう組織なのかを知ってもらう必要がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・既存の連携があり、地活協として継続して連携されている事例はある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の清掃等の地域活動で、建設会社等の企業と連携実施。 ・地活協の新規事業として「地域のまつり」を企画、青年関係の団体が中心になり、他の地域団体と連携。また、専門学校、市場、劇場などが協賛協力している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・連携できそうだと思いますが、WIN-WINになるイメージがもちにくい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・地活協の運営委員が商店街の役員である場合が多いため、地活協の行事にうまく連携が図れている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な事案があって、初めて連携の話になるのではと思います。
	<ul style="list-style-type: none"> ・地域にある専門学校と地域の会館の連携。地域の会館で講習や実習をしてもらう取組を進めようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・区社協がまちセンを担っているところは、福祉のNPOとの連携が進んでいると感じました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・地活協の行事に対し、近隣の専門学校が、各ブース等の手伝いを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域は、本当にNPOと連携をしたいのか?したくないのか?必要としていないのか?逆にNPOも地域と連携したいのか?確認できない。
	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉施設等と連携して行っている事業がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域とNPO、企業とのつながりづくりには、間に入るコーディネートの役割が重要。
	<ul style="list-style-type: none"> ・夏祭り・盆おどりの開催にかかわって、地活協・企業・施設・学校・商店街等でマンパワー提供、資金提供、場所提供が行われています。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NPOって何というレベル。地域からNPOは見えていない。
	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者福祉施設が地域のまつりに参画して協力する。そこから他地域へも波及し、参画、また、地域アクションプラン事業に参加と広がりがあがる。 	

※大阪市民活動推進審議会ワーキング部会委員と対象者(区役所職員及びまちづくりセンター職員)との意見交換会